

報告2：酒井亨（金沢学院大学）

台湾民主化以降のホーロー語文学における日本イメージと政治的含意
(序説)

台湾においては、冷戦終結後に進んだ民主化の過程で、それまで抑圧されてきた土着諸言語の復興運動が起こった。その中で、台湾住民の七割の母語とされる「台湾語」、学術的に限定するならば、南部福建系の「ホーロー語」（以下この呼称を用いる）による文学・芸術的な創作も盛んに行われた。しかしながら日本において台湾文学を紹介する際には、主として戦後公用語とされてきた華語（国語、北京語）による創作が取り上げられ、ホーロー語をはじめとする母語による創作は等閑にされがちであった。

だが、1987年にホーロー語による中編小説「抗暴的打猫市」を発表した作家・宋沢葉によれば、台湾文学では言語によって、かつての支配者・日本人および日本帝国、あるいは戦後の「外省人」および中華民国に対する表現には違いがある。すなわち、日本語では日本に対して好意的になりがちで、華語では中華民国に対して遠慮がちとなる、という。

つまり、台湾においては同一の表現者が言語によって表現を使い分けており、そこには政治性を内包していることになるが、この問題が日本においてあまり議論されてこなかった。

報告者は文学研究者ではなく、政治学研究者であることから、ホーロー語文学における日本イメージについて、文学そのものではなく、政治学的な観点から、その政治的な意味を解説することとする。

世界には多言語社会が数多く存在し、また台湾と同様に土着言語が抑圧されてきた歴史を抱えたり、いわゆる民族矛盾の火種となっている地域は多い。

言語による表現の違いは、台湾だけでなく、旧ソ連や今の中華人民共和国が内包する課題にも通じるものがある。

本テーマによる研究は開始から間もないため、序説の域を出ていないが、旧ソ連圏や現代中国の言語・民族問題にも通用する普遍的な視座や方法論にも繋がるであろう。